

概要

八丈語は上代東国方言にみられる方言的特徴を色濃く保存していることで知られる。上代東国方言とは、奈良時代の万葉集の東歌（巻 14）と防人歌（巻 20）にみられる、中央奈良の言語、いわゆる上代語とは異なる方言をさす。東歌はおもに現在の関東とその周辺の人びとが詠んだ歌であり、防人歌はおもにかれらが九州太宰府の地や地元関東などで詠んだ歌である。この時代はもちろん、このあとの長い時代においても、中央語以外の方言がこのようにまとまったかたちで保存されている例はほかになく、日本語の成立を考える際の貴重な資料となっている。これらのほかにも、八丈語には係り結びのような文法現象がみられるなど、古い要素を保っている。

用例は、とくに断らないかぎり、八丈語は 6 地区（八丈島の三根^{みつね}、大賀郷^{おおかごう}、檜立^{かしたて}、中之郷^{なかのこう}（略称 N）、末吉^{すえよし}（略称 S）の各地区、および青ヶ島^{あおがしま}（略称 A）のうち三根地区のもので、例文は民話や談話、八丈民謡「しよめ節」の歌詞などである。出典のない例は三根での聞き取り調査によるものである。三根では長い母音のエーとエイ、オーとオウを区別するが、この対応関係は地区によって異なる。

1. 上代東国方言とかかわる諸現象

1. 1 動詞のオ段連体形

中央語の動詞連体形はたとえば「降る雪」のようにウ段「る」で名詞につづく。これが東国方言ではフロ雪のようにオ段になる。（3414 の「現はる」は四段動詞である。）

3423 上野^{かみつけの} 伊香保の嶺ろに 降ろ（布路）^{よき} 雪の 行き過ぎかてぬ 妹が家のあたり

3478 遠しとふ 故奈の白嶺に 逢ほ（阿抱） しだも 逢はのへしだも 汝にこそ寄され

3414 伊香保ろの ^{やさか} 八尺のみでに 立つ虹の 現はる（安良波路） までも さ寝をさ寝てば

八丈語の例をみてみよう。八丈語でも同様に動詞の連体形はオ段であられる。

・ムチューン ナッテ オロ マン ヒョウラドキガ ヒツギトーデ（夢中になって織るあいだに、お昼時がすぎてしまったので：民話・七夕さま）

・モッテ イコ オボンニ ノセトッテイ ヒョ ツケテ ヤケバ（持っていくお盆にのせてから、火をつけて焼けば：民話・人捨て穴）

・コノ コワ オヤゴロシドーテ イケーテ オコ コトワ デキンナカーテッテ（こいつは親殺しだから、生かしておくことはできないといて：民話・ハウエン越し）

この連体形に終助辞ワやジャなどがつくと終止形になる。つぎのはじめの例で、直訳で「行くよ」にすると未来になるのだが、さいごの例もふくめて現在の意味で使用されている。この方言のテンス・アスペクトに関してはあとであらためてふれる。

・ケイワ ドコソコドンネイノ ナヌカデ テラメーリン イコワ。（きょうはどこそこ殿の家の七日で、

寺参りに行くところだよ。：民話・水守)

・ハノ ジョウブン ナロワ。(歯がじょうぶになるよ。)

・ハルガ キタロウ ショク ナク アリヤリヤ ナイテ ツゲロジャ ウグユスガ (春が来たのを知らないでいたら、鳴いて告げるねえ、ウグイスが：春山節)

日本語諸方言のほぼすべてで、終止形と連体形は「飲む」「飲む人」のようにほとんどおなじ形になっているが、もともと終止形は「飲み」、連体形は「飲む」のように形が別だった可能性があるとしていられる。そのなごりは存在動詞の終止形「あり」と連体形「ある」などにみられるが、ほかの動詞ではその違いがなくなっている。

一方、八丈語では、ふつうに使用される終止形は連体形ノモをもとに終助辞ワやジャをつけてつくられるノモワ、ノモジャなどの形なのだが、推量形のノムノウワ (飲むだろう) や伝聞のノムテイヤ (飲むそうだ) のなかに古い終止形のなごりとみられるノムがあらわれる。こうして、八丈語では終止形と連体形が、かつては別の形だったことがわかるのである (狩俣 2014・2016 によれば、才段連体形は琉球諸語のうち、おもろそうしと八重山語の一部にもみられる)。

このように、終止形と連体形のかたちが異なり、かつ、中央語の終止形と連体形の古い対立とみられる「あり」と「ある」というタイプとも異なるという点は注目すべきだろう。

上代語以前 終止形：ノム？ノミ？ 連体形：ノム？ノモ？

上代語 終止形：ノム 連体形：ノム

東国方言 終止形：ノム 連体形：ノモ

八丈語 終止形：ノム(ノミ？) 連体形：ノモ

1. 2 動詞のノマロ形

シアリ形は上代語の、基本的には強変化四段動詞にみられる語形である。～i ar～が融合して～er～となる。

3925 新しき 年の初めに 豊の年 しるすと ならし 雪の 降れる (敷礼流) は

832 梅の花 折りて かざせる (加射世留) 諸人は 今日のあいだは 楽しくあるべし

東歌や防人歌に見られる東国方言ではこれが～er～ではなく～ar～であらわれる。

3469 ^{ゆふけ}夕占にも 今夜と告らろ (乃良路) 我が背なは あぜども^{こよひ}今夜 よしろ来まさぬ

3546 青柳の はらる (波良路) ^{かはと}川門に 汝を待つと ^{せみど}清水は汲まず ^ど立ち処 ^{なら}平すも

これは本動詞「飲む」と補助動詞「あり」の組み合わせである「飲みあり」の連体形「飲みある」に対応する語形であるが、ここにはふたつの現象がふくまれる。ひとつは動詞の才段連体形とおなじもので、補助動詞「あり」の連体形「ある」が才段のアロとなる現象である。もうひとつは、「飲みある」が融合して、古代中央語で「飲める」とエ段になるところを、飲マロとア段になる現象である。この形は現在の結果の状態の意味で使用される。

八丈語のなかでも高齢層が使用した、より古い八丈語では、強変化動詞 (四段活用) では飲マロ、弱変化動詞 (一段活用) ではテをふくむ見タロが連体形としてそのまま使用されたが、現代八丈語では r が脱

落して、(t)aro>(t)ao>(t)o:のように融合した飲モー、見トーが使用される。しかし、この連体形をもとにした過去の終止形では融合せず、飲マロ、見タロに終助辞ワが融合して飲マラ（飲んだよ。）、見タラ（見たよ。）となる。

- ・ゴジューニ ナロー (<ナラロ<*ナリ アロ) オヨー ブッチャリキラズン (五十歳になった親を捨てきれずに：民話・人捨て穴)
- ・ンーマソウニ ウモー (<ウマロ) モモガ ナガレテ クルテイテ (うまそうに熟んだモモが流れてくるそうで：民話・桃太郎)
- ・オニメガ ツメデ カコー (<カカロ) イシノ アトガ マンデモ シローク ノコッテ アロガ (鬼の爪でかいた石のあとが、いまでも白く残っているが：民話・桃太郎)
- ・カビァヨワ ツ布林 ノセテ ササガラ (<*ササガロ ワ)。(桑の葉は頭にのせてはこんだよ。) N
- ・アー ホントー ソガンダー コトガ アララ (*アラロ ワ) ナー。(ああ、本当、そのようなことがあったねえ。) S

八丈語でアリのついた形が強変化動詞でテをふくまないということは、中央では上代にすでに強変化動詞のタリ形があらわれていることを考えると、そして、中央ではその後タリ形に一本化する方向に向かうことを考えると、上代以前の状態を保持しているとみてよいだろう。弱変化動詞のほうは上代にはすでにほぼタリ形になっていて、八丈語でも強変化動詞以外はすべてタリ形である。

1. 3 テンス・アスペクトにかかわって

八丈語でもふつう、動詞にアリのつかない語形（以下、非アリ形とよぶ）は非過去（基本的には未来）をあらわし、アリの融合した語形（以下、アリ形とよぶ）は過去をあらわす。しかし、八丈語ではまだ一部に古代語的なテンス・アスペクト体系を保存していて、非アリ形が現在進行中の動作をあらわすことがある。以下はすべて、再帰的な意味で使用されていて、はじめの2例は他動詞と語形が異なる。

- ・マニャ アニョ シテ アロ？/カラドー フケロワ。いまはなにをしてるの？/(自分の)体をふいているよ。(他動詞はフコワ。)
- ・マニャ アニョ シテ アロ？/ホトウテ ホトウテ アオレロワ。いまはなにをしてるの？/暑くて暑くて(自分を)扇いでいるよ。(他動詞はアオロワ。)
- ・アニョ シテ アロ？/カブメン カマレトー トコウ カコワ。なにをしてるの？/蚊に刺されたところをかいてるよ。
- ・ヤメロンテ スリタテロワ/ナデロワ。痛いからなでてるよ。
- ・ヤメロンテ モモワ。痛いから揉んでるよ。
- ・ケーガッテ ケーガッテ モガコワ。かゆくてかゆくて、もじもじしてるよ。

かぎられた動詞に連体形=ワイという語形があり、受け手発言のなかで主として話し手の現在進行中の動作に使用される。

- ・アニョ ショーイ？/タバコウ ノモワイ。なにをしてるの？/タバコをすってる。
- ・アニョ ショーイ？/ヨウケイ カモワイ。なにをしてるの？/夕食を食べてる。
- ・アニョ ショーイ？/ゴミョ ヤコワイ。なにをしてるの？/ゴミを焼いてる。
- ・アニョ ショーイ？/キリボー キロワイ。なにをしてるの？/切り葉を切ってる。
- ・アニョ ショーイ？/フレイ ヘーロワイ。なにをしてるの？/風呂へ入ってる。

- ・アニョ ショーイ？／ネロワイ。なにをしてるの？／寝てる。

この典型がつぎにあげる感嘆文における詠嘆の用法である。

非アリ形の飲モとアリ形の飲マロには、それぞれ詠嘆のヲが融合した語形（名詞の対格と同音）の飲モウ（<*ノモ ヲ）、飲マロウ（*ノマロ ヲ<*ノミ アロ ヲ）がいわゆる感嘆文に使用され、目の前における動作や変化の進行（ノモウ）、動作や変化の結果の状態（ノマロウ）をあらわす。この用法が、アリの有無による現在の進行と結果という、古代語のアスペクト現象をもっともよくあらわしているだろう。そして、この感嘆文の用法にはいわゆる連用形ノミも詠嘆のヲが融合した飲ミョ（<*ノミ ヲ）で述語にあらわれ、結果の状態の量的な強調に使用される。

- ・バー マダ ツムゴウ！（まあ、まだ（糸を）つむいでる！）ノモウ形。動作の進行
- ・バー ハー ツムガロウ！（まあ、もうつむいでる！）ノマロウ形。動作の結果の状態：仕事ははやく終わったのをみて。
- ・ツムギョ！（つむいだねえ！）ノミョ形。動作の結果の状態：量におどろいて
- ・コラ コーコウ！（これ、かわきかけてる！）ノモウ形。変化の進行
- ・ハー コーカロウ！（もう、（洗濯物が）かわいてる！）ノマロウ形。変化の結果の状態
- ・キー シッカイ コーキョ！（まあ、たくさんかわいてる！）ノミョ形。変化の結果の状態

連用形ノミにはこうした感嘆文の述語以外に、詠嘆のヲがつかない単独での終止用法がいくつかある。

- ・ソイデ ゼンブ ヘーリ！（それでぜんぶ入った！）ボールがゲートに。味方が成功して。直前過去の感嘆文
- ・キタカト モウト ヒッケーリ。（来たと思うと、（すぐ）帰った。）直前過去の独話文
- ・コラ シゴトウ タノムト スグ ニゲ。（こいつは仕事を頼むとすぐ逃げる。）属性的

八丈語の古さを考えると、こうした連用形の終止用法をさきにふれた上代以前の終止形（飲み）と比較したくなるが、すでに中央語にその痕跡はほとんどない。

八丈語にはさらに過去のキに由来する語形があるが、現代八丈語での使用は少ない。

- ・アガ カコ シュングリ ウイガ ケシチ（<*ケシ シ）ガー。（私が書くとすぐ順々に、あいつが消したっけなあ。）
- ・ハウジ（<*ホホミ シ）ガ。（（口に）ふくんだっけなあ。）
- ・イツ フララッチ（<*フリ アリ アリ シ ニ）？（いつ降ったんだっけ？）日照りつづきのあとで。
- ・キョネン オトトシャ オドラッチ（<*オドリ アリ シ） サマモ イマジャ トウロウノ フサトナリ（去年おととしは元気に踊ったあの方も、いまでは亡くなって、灯籠の房になってしまった：民謡・しよめ節）
- ・ナブレ カクレニ オジャラッチ（<*オジャリ アリ シ） サマモ イマジャ アシダデ チョウチンデ（こっそり隠れながら私のもとにかよっていらっしやったあの方も、いまでは堂々と足駄をはいて、提灯を提げて：民謡・しよめ節）
- ・ハンズメ ノマッチ（<*ノミ アリ シ） サケイ モッテ コ。（さっき飲んだ酒をもってこい。）
- ・ウクン アラッチ（<*アリ アリ シ） ヒトワ アダン ナッテ アルダロウ？（あそこにいた人はどうしているだろう？）
- ・アッチ（<*アリ シ） トキ ドウシン イカロージャー。あのときいっしょに行ったじゃない。
- ・ウクン サカッチョ（<*サキ アリ シ ヲ）トラズン チレー シモーロージャ。（あそこに咲いた

のをとらずに、散らせてしまったね。)

・ウノトキ ンーマソウニ ノンジンテ (<*ノミ シ ヨリテ) ヨッポド スキデカ アンノウ。ウイト オンナシドーテ コレイ モッテ キタラ。(あのときうまそうに飲んだから、よほど好きなんだろう。あれとおなじだから、これを持ってきたよ。)

これらをまとめて八丈語と上代語の時間表現を比較してみよう。形をそろえるために未来以外を連体形でしめしてあるが、八丈語の未来ノモウが一人称の意志をあらわすことをのぞけば、まったく同じであることがわかる。このように八丈語は上代語のテンス・アスペクト体系を、部分的にとはいえ数十年まえまではほぼそのまま保持していたことがわかる。(ノモウの ou は共通語の o: に対応する。)

	未来	現在		過去
		進行	結果	
上代語	のまむ	のむ	のめる	のみし
八丈語	ノモウ	ノモ	ノマロ	ノンジ

1. 4 推量のナモ

八丈語と共通する上代東国方言の特徴の一つが推量形である。古代中央語では推量をあらわすのに「む、らむ」という要素が使用されるが、東歌ではそれがモ、ナモのように、動詞連体形とおなじオ段であらわれ、かつ、r が n であらわれる。万葉集の例には八丈語と直接かかわるナモだけをあげる。

3476 うべ兒なは ^{わぬ}我に 恋ふなも (故布奈毛) 立と^つ月の のがなへ行けば 恋ふしかるなも (故布思可流奈母)

3563 ^{ひたがた}比多瀉の 磯のわかめの 立ち乱え 我をか 待つなも (麻都那毛) 昨夜も^{きそ}今夜も^{こよひ}

八丈語ではこのナモに由来する要素が推量形のもとになっていて、現在でも主流である。その結果、東日本的な(南琉球八重山語の一部と宮古語全域にもみられる)推量のベシ由来形は八丈語にほとんど入らなかった。

・モモカー ウマレトーテ アダン モモタロウテ ヨ ナガ イチバン ヨカンノウワ (<*ヨク アル ナモ ワ) ノー。(モモから生まれたから、やっぱり、桃太郎という名がいちばんいいだろうね。: 民話・桃太郎)

・ハヤ ジューネングレーニワ ナルナオワ (<*ナル ナモ ワ) タテテ。(もう 10 年ぐらいにはなるだろうよ、(社を) たてて。) A

・ムカシワ イチバン ニギヤカダランノウワ (<*ニギヤカデ アリ アル ナモ ワ)。(むかしはいちばんにぎやかだったと思うよ。)

・ウレン ハネー ムロウベイ。(あの人に話してもらおう。) 意志 ベシ由来形

.....

形容詞のエ段連体形

動詞ではないが、上代東国方言の大きな特徴の一つである形容詞のエ段連体形も八丈語にみられる。動詞のオ段連体やシアリ形は琉球諸語にも一部みられるが、この特徴は琉球諸語もふくめ、八丈語以外には

みられないものである。

中央語の形容詞連体形はたとえば「高き山」のようにイ段の「き」で名詞につづく。これが東国方言ではタカケ山のようにエ段となる。

4369 筑波嶺の さ百合の花の 夜床にも かなしけ (可奈之家) 妹そ 昼もかなしけ (可奈之祢)

3557 悩ましけ (奈夜麻思家) 人妻かもよ 漕ぐ舟の 忘れはせなな いや思ひ増すに

3483 昼解けば 解けなへ紐の わが背なに 相寄るとかも 夜解けやすけ (等家也須家)

八丈語の例をみてみよう。形容詞の連体形は八丈語でも同様にエ段であられる。

- ・ナカカラワ スバラシケ タクマシケ オノコゴノコガ ウマレテ キトーデ (中からはすばらしい、たくましい男の子が生まれてきたので：民話・桃太郎)
- ・コノ ヒニヤ モー ワカケ ヒトモ トショリモ ミンナガ ガッコノ ニヤーイ デテ ヤスモヒデ (この日にはもう、若い人も年寄りも、みんなが学校の庭へ行って休む日で)
- ・ネッコケ トキニワ カサネギョ セーテ ポウク ナロシャン タケノ カワ (小さいときには重ね着をさせて、大きくなるにつれて竹の皮のように：しよめ節)

この連体形に終助辞ワがついて融合したタカキヤ (高いよ) や、そのままジャがついたタカケジャ (高いねえ) などが終止形として使用される点は、動詞と同様である。はじめの例ショッキヤは、*シロシ (著し・白し) の連体形*シロケがショ(ッ)ケに変化し、ワが融合したものである。

- ・シーガ オヤガ ショッキヤ。(おまえの親が知っているよ。) N
- ・オモシロケジャ ナ ワガコノ ナコワ テラノ デイシュンドンノ キョウヨリモ (おもしろいねえ、うちの子の泣くのは。寺のデイシュン殿のお経よりも：しよめ節)
-

2. そのほかの古風な文法現象

2. 1 強調と疑問の係り結び

2. 1. 1 強調の係り結び

八丈語にはコソに由来する強調の係り結びと、カに由来する疑問の係り結びが存在する。

コソに由来する強調の係り結びには強調辞カによるものと、さらにそれにワが融合したとみられるコー (地区によってはコア、カー) によるものとの二種類がある。これらによって強調されると、古代語同様、述語はいわゆる已然形になる。話者にはほとんど意識されないようだが、後者コーのほうがより強調が強いようで、結びにはノダのような意味の指定ナリの已然形ナレが変化した、ネー (地区によってはネァ) が義務的である。

- ・ワリヤ ナ オメイヤカ タレドノ スナヲ トリテ オガメガ カミガミニ (わたしは (あなたを) 思っているからコソ、垂土 (地名) の砂を取ってきて拝むのです、神々に：しよめ節)
- ・タケボーキデカ アラレ。 タケデカ カコエダレ。(むかしの箒は) 竹箒でコソあったよ。竹でコソ掃いたんだよ。) N
- ・ジブンノ ウチデカ ワケーテ ハイレガ。(自分の家でコソ (風呂を) 沸かして入るよ。) A

- ・アガコー ソゴン ヤンネー。私がコソそう言ったよ。
- ・ソノ イトーコア ネングニ オサメタンネア。(その糸をコソ年貢に納めたんだよ。) N

さらに強調の度合いを強めたいばあいには、コソやカコソ、カコーが使用されることがある。『八丈島の言語調査』(国研 1950)にも同様の例が報告されている。

はじめの2例はふつうの強調文である。つぎの2例はコソによる強調文で、カの強調文とおなじ結びである。さいごの2例はカコー、カコソによる強調文で、結びがコーの強調とおなじナリの已然形になっている。

- ・オメイヤカ クレ。思っているからコソ来るのだ。
- ・スキダリヤカ ノメ。好きだからコソ飲むのだ。
- ・オメイヤコソ クレ/キタレ。思っているからコソ来る/来たのだ。
- ・スキダリヤコソ ノメ/ノマレ。好きだからコソ飲む/飲んだのだ。
- ・オメイヤカコー クネー。思っているからコソ来るのだ。
- ・オメイヤカコソ クロダンネー。思っているからコソ来るのだ。

すくないことをあらわすコシやチートをもつ肯定文や、コソによる肯定の強調文では、～シカ～ナイを使用して否定文に訳したほうがいいばあいがある。ぎゃくにいえば、共通語でシカを使用するような場面でも、それが使用されないことがあるということである。これは、近世中期以降にあらわれるという、中央語のシカの歴史の浅さと無関係ではない。

- ・チート ヤシノーライドウ シッカイ トララー。少ししか(蚕を)飼わなかったけど(少し養ったけど)、(糸を)たくさんとったよ。
- ・ウラ コシ トロデ ハンパデ ダメダラ。あいつは少ししか採らないので(少し採るので)、半端でだめだ。
- ・ハー サカンヨワ トウテ コシコー トマルネー。もう(椿が)盛り(を)はすぎて、(実が)すこしコソつくよ(少ししかつかない)。
- ・ナル ハズワ ナキャ ワレン テツカ アネーダンネーガー。(そんな年に)なるはずはないよ、私よりひとつしか上じゃないんだから(ひとつコソ年上だ)。S
- ・ゴエンジャ ナッキヤ。サンエングリアデカ アンネア。5円じゃないよ。3円ぐらいでしかないよ(3円ぐらいでコソある)。N

2. 1. 2 疑問の係り結び

カに由来する疑問の係り結びは、質問というよりも自問自答的な用法が基本で、結びには推量ナモの連体形が義務的である。

- ・チャカレタ ナナチャノ カケラヲ ホレイ ツキカ スノウト ノセテ ミル。(割れた飯茶碗のかけらをひろい、くつつくかなあと、のせてみる：しよめ節)
- ・ドケイカ イクノウ? (かれは)どこへ行くのかなあ?
- ・コノ カケザラヲ アニョカ オスナルノウ。(この欠け皿は(まったく!)なにを言ってるんだろう。：民話・欠け皿) 反語

はじめの例は動詞の分析形だが、あとの2例とつぎの東歌の例とを比較すると、名詞格形式=カ+動詞

終止形接続推量形という点までおなじ構造であることが分かる。

3563 ^{ひたがた}比多瀉の 磯のわかめの 立ち乱え 我をか 待つなも (麻都那毛) ^{きそも}昨夜も ^{こよひも}今夜も

2. 2 否定形にみられる「ず」以前の形態

古代語の否定「ず」は上代にはすでに「ず」であり、おなじ否定系列である「ぬ」や「ね」と子音が異なっていた。これについては、ごくわずかな例から「にす」が変化したものである可能性が指摘されているが、しかし推測の域をでるものではない。一方で、八丈語の古いタイプの否定終止過去断定形（ノミンジャララ：飲まなかった。）や否定終止非過去推量形（ノミンジャンノウワ：飲まないだろう。）には「ず」以前の姿がたもたれている。否定の要素はもともとナ・ニ・ヌ・ネのように「ふつうに」変化したとみられるが、その連用形ニとサ変動詞のスの連用形に由来する、ニシをふくむ語形がそれである。つぎのはじめの例は、動詞連用形イエミ（笑み：口を開く・割れること）＋ニシ＋アル＋推量ナモ＋終助辞ジャ（＜*ニテハ）が変化したものである。これが正しければ、この方言の否定形は、すでに「ず」になっていた奈良時代の奈良以前の姿を保っていることになる。

・コレガ コーベワ マダ イエミンジャンナオジャ（＜*イエミ ニシ アル ナモ ニテハ）？（これ（椿の実）の皮はまだ割れないだろう？）A

・フロイッパーノ ミズー タミーシャーテワ ホントーン ナナタビモ トータビモ イカズニワ
フロイッパーノ ミズワ タマリンジャララ（＜*タマリ ニシ アリ アロ ワ）。（風呂いっぱいの水をためようとしては、本当に、7回も10回も（水汲みに）行かなくては、風呂いっぱいの水はたまらなかったよ。）S

これらの語形のニシ以下の部分については無理のない変化なのだが、その接続、つまり中央語をふくむ日本語諸方言で否定形はすべてノマ・ナイのように「未然形」接続となっている。これに対して、この方言ではイエミ、タマリと連用形に接続しているという点、接続一般としては連用接続がごくあたりまえであるとはいえ、今後解決しなければならない問題だろう。

これらの語形は、とくに坂下ではノミンナカ（飲まない。）からの類推で、ノミンナララ（飲まなかった。）、ノミンナンノウワ（飲まないだろう。）のような新しい語形になっている。

3. 島内の差異

八丈島には旧5カ村があったが、二つの山にはさまれ平坦で大きな港もある2地区を坂下、東山（三原山）南部の斜面に点在する3地区を坂上と称していた。坂下と坂上のあいだの移動手段は、明治期に坂下の大賀郷と坂上の檜立をむすぶトンネルができる以前は東山を縦断するか、北側の曲がりくねった山道を通るかしかなかった。トンネル開通後は島内ルートのもっとも奥だった檜立地区が、逆に坂上地区の玄関になった。こうしたこともあって、坂下2地区と、とくに坂上の檜立とそれに隣接する中之郷地区の方言差は小さくない。方言以外でも、民謡の歌い方などに坂上地区の古さが残っている。

3. 1 撥音便と促音便

¹ 伊藤 1983 によれば、千葉山武方言に並立形「～しないし」の意味でノミシツ、ミーシツ、シーシツがあるが、この語形の連用形接続を伊藤は弱変化動詞からの類推ではないかと考える。

本土方言では音便化する際、概略、東日本は子音を保存し、西日本は母音を保存する傾向がある。共通語のカ行動詞では唯一「行く・行って」だけが東日本的で、ほかのすべてが西日本的にイ音便になるのに対して、促音便化する。八丈語ではすべてのカ行動詞が促音便である。したがって、「降る」と「吹く」がともにフッテとなる。ただしこの現象は動詞に限ったことではなく、双子のタンゴ（坂下）とタッゴ（坂上）などのように名詞語彙にもみられる。

- ・オメーガ カッテ オットウテ ヨデ カッテ ミタイドウ ヨク ウイダケ カケタンノウト モッテ ワイモ ソベイテ。あなたが、書いておいてというので、書いてみたけど、よくあれだけ書けたもんだと思って、私もおどろいて。
- ・カゼガ フッテ アロワ。風が吹いている。

八丈では坂下よりも坂上のほうがより古い傾向があって、マ行動詞やバ行動詞、ナ行動詞は、坂下では撥音便であられ、坂上では促音便であられやすい。この点も、より母音的な撥音便よりも、より子音的な促音便のほうが東日本的といえるだろう。

坂下

- ・デンダノ コワ メシニ オカズデ カンデ アロデコー キーロクテ ホソゾロデ デーチケ インノウ マララッテイニ。伝田の子はご飯におかずで食べているので、黄色くて、細長くて、きれいなウンコをしたそうだし。(民話)
- ・ヒデリナンカデ アメイ タノシンデ アロ トキン。ひでりなんかで雨を楽しみにしているときに。

坂上

- ・コドモニワ ホーキシバン コミー ツツッデ ニテ カマセタラッティージャ。(大切な)子どもには、ツワブキの葉に米をつつんでたいて食べさせたそうじゃない。N
- ・ノッデ アリモ アリ。(きのうあいつはいつまでもその席で) 飲んでいたよ。N
- ・イエツコガ ヨケ カゲニ イサガ イクツン ナルカダーガ ソノ ナガサ コガン イェツコト スッデ アルダー。エツコがいいおかげで、イサが何歳になるかだけ、その長さ、こうやってエツコと住んでいるんだよ。S

坂上ではまったく音便化しない例もみられる。(ピで母音の無声化が起こっている点は東日本的か)

- ・アリャ ワガ エシャン トピテ イカーダージャン。私はわが家へ駆けて行ったんだよね。S

3. 2 サ行動詞、使役動詞の音便

サ行動詞でsが脱落し音便化するのは西日本的な現象とみてよいが、サ行動詞の～asiと使役動詞の～aseは、坂下では音便化しやすく、坂上ではしにくい。おそらくこの音便化は近世以降の中央語の影響であるために、坂上まではその影響がほとんど及ばなかったのではないか。はじめの例のハネーは融合の結果の長母音の影響でテが脱落したものである。

融合

- ・ウレン ハネー ムロウベイ。あの人に話してもらおう。(意志)
- ・ソノ コトワケイ ハネーテ テラン トメテ ムロウト チョウド ドコノカ タイケノ ホウジガ アロー ヒデ。その事情を話して寺に泊めてもらおうと、ちょうどどこかの大家の法事があった日で。

- ・オメー ソコウ カキミッテ サソリン ササレンノカ ヨウテ ハネー(テ) ミッテ。あなた、そんなところをかいたりして、サソリに刺されていないかい？と話して歩いて。
- ・克蘭 シタカラ ウスー ヒッコロガシデーテ。倉の下から臼をころがし出して。(民話)
- ・バー ウノヒトワ フトンカー アショダケ デーテ アロウ！ まあ、あの人はふとんから足をだけ出している！
- ・イヌメト サルメト キジメン ヒケーテ ケーテ キテ。イヌとサルとキジにひかせて帰ってきて。(民話)
- ・ノウ ソイガ ソノ ザルゲー ヘーテ カトガレテ イッテ ホウイェンゴシノ ママカー マクラケーテ コロサレタラッテイジョウテ ヨ ハナシ。また(罪人は)自分からそのザルに入って、かつかれていって、ホウエン越しの崖から落として殺されたそうだと、という話。(民話)

融合と非融合が混在

- ・アガ チーテ イケバ ヨカローニ トリデ イカセテ ケゴー セーテ シモーララ。私がついて行けばよかったのに、ひとりで行かせてけがをさせてしまった。

融合せず

- ・タコウ ハローシャーテワ ハヤークカラ タケイ キッテ ワッテ アマデ カラシテ。凧を張ろうとしては、はやくから竹を切って割って天井で乾かして。

坂上末吉の例 融合

- ・メンナー オッチレーテイ ニゲタラーデ… オゴシノ ホーカラーイ。みんなをおっ散らして逃げたもので… 尾越(地名)のほうから。S

坂上中之郷の例 融合せず

- ・ムカシノ コトワ ハナシテモ ハナシキリナコダラ。むかしのことは話しても話しきれないんだよ。N
- ・コドモニワ ホーキシバン コミー ツツッデ ニテ カマセタラッティージャ。(大切な)子どもには、ツワブキの葉に米をつつんでたいて食べさせたそうじゃない。N
- ・ソイカラ ジョーヒラノガワ ヤドノ アロアヨ ヤドジャ オラズニ アダニ オロー ホードア ヒトモ アロン オロー ホー ナッケ ヒトモ アロンドアンテ ヤクバデ タノッデコー オラセタンネア。それから、上平(織物の一種)のは宿があったけど、宿では織らせず、なにしろ、織れる人もいるし、織れない人もいるしだから、役場で頼んで織らせたんだよ。N

文献

- ・伊藤一也 (1983) 「千葉方言の文法—山武方言の名詞・動詞の形態論—」『琉球方言と周辺のことば』 pp.65-105
- ・金田章宏 (2001) 『八丈方言動詞の基礎研究』 笠間書院
- ・金田章宏 (2012) 「八丈方言における新たな変化と上代語」『言語研究』 142号 pp.119-142
- ・かりまたしげひさ (2014) 「連体形語尾からみた『おもろさうし』のオ段とウ段の仮名の使い分け」『沖縄文化』 第48 巻第2号。 pp.187-198
- ・かりまたしげひさ (2016) 「琉球諸語のアスペクト・テンス体系を構成する形式」田窪行則, ジョン・ホイットマン, 平子達也 編『琉球諸語と古代日本語 — 琉球祖語の再建にむけて』 pp.125-147